



京都大学大学院人間・環境学研究科教授

船曳康子氏の著書

「MSPAの理解と活用」

——一人ひとりの個人差を理解し、生活の場で「暮らしやすくする」支援のために

概 要

MSPAの開発背景

これまでの状況では、診断があれば支援につながるという観点から診断が重視され、結果として診断が可能な医療機関への待機がさらに診断が重視され、結果として診断が可能な医療機関への待機がさらに増え、多様な個人差への個別的な対応が後回しにされてきた感があるように思います。結果として、支援まで遠回りになってしまっていたのではないのでしょうか。

こうした問題を解決するために一つのアプローチとして、診断の手前で個人の特性を理解し、生活の場で、できる支援をするといった体制の整備が必要なのではないかと私は考えています。医療機関での診断ありきではなく、その手前の教育の現場や各自治体でカウンセラーや特別支援コーディネーター、発達障害支援センターなどが当事者やご家族からの相談を受け、支援をスタートさせることができれば、これまでの支援の枠組みでは後手に回っていた当事者の個別の状況への対応を充実させることができます。

MSPの特徴

診断ありきではなく、診断に先立って個々人の発達特性を評価し共有することで、早い段階から当事者の特性に見合った個別的な支援を行うことが可能となります。「障害」という言葉への偏見やためらいが受診への障壁となっていました。MSPAではこれに配慮して障害という言葉を用いず、また診断名も使わずに、特性を示すことにしています。このことによって、特性評価を受ける側と薦める側の両方にとって敷居を下げるができますし、また支援者の間での評価の共有がやりやすくなると思っています。

MSPAは診断ではなく支援目的として開発されたツールのため、生活現場での活用を重視して評価尺度が設定されています。当事者だけではなくご家族や教師といった異なる立場



の多様な支援者が特性の個人差を視覚的に理解できるよう、こだわり・睡眠リズム・反復運動といった当事者が困りやすい要素とのその要支援度をレーダーチャートに示しています。個人特性を理解するためには本人がどのように・どの程度困っているのかという指標が重要となるため、MSPAでは当事者・養育者からの生活歴の聴取を通して、当事者と評価者である専門スタッフとが共同でこの特性チャートを作成します。MSPAの評価項目や評価基準については、あとの第二章で具体的にご説明しますが、支援の必要な特性とその程度の視覚化し、当事者と支援者がそれを共有できるようにするということが大きな特徴となっています。

支援の充実のためには支援者と医療機関とが共通認識を持って連携をとっていくことが肝心ですが、発達障害に関わる専門家は精神科医、公認心理師や臨床心理士などの心理学的支援者、精神保健福祉など多様な分野にまたがるため、専門ごとの認識の差という者も生じがちです。こうした専門家での連携構築においても、MSPAはそのきっかけや共通言語となるツールとして使いうるのではないかと考えています。MSPAは発達障害者の特性を視覚的に表すことで、当事者と周囲の双方が特性について共通理解を持つのを促すことができます。また、どのような生活現場でどのような支援を必要としているのかを多職種にわたる支援者で共有することは、支援の迅速化やうつ・神経症などの二次障害の予防にもつながると考えています。

二次的な問題を予防する

発達障害を遠因とする二次的な問題として、不眠やうつ、神経症などのメンタルヘルスの悪化があげられます。また、妄想傾向やパーソナリティへの影響も考えられます。診断の有無に関わらず、また診断上は値未満となる場合でも、個々人の特性によって生活上の困難が生じることは多くあります。特性の程度、環境要因、認知能力、ストレス耐性など様々な要因が絡み合うため複雑な問題ではありますが、発達特性に由来する困難を抱える人に対して適切な支援を行うことが、二次的精神疾患の減少につながり、ひいては、いじめや引きこもり、就労をめぐるトラブルといった様々な社会問題の緩和にもつながると考えられます。

二次的な問題を予防するには、当事者が自らの発達特性を知り、周囲とそれを共有し、それに見合った環境を選んでいくことが必要です。発達特性をよく知ることで二次的な問題を予防するという視点が常用であると考えます。

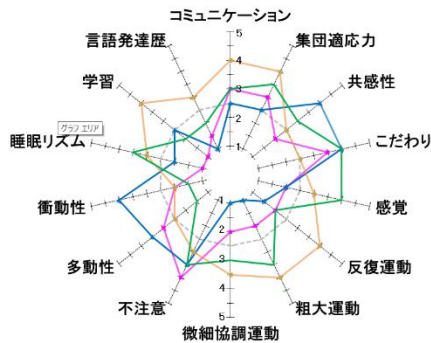
レーダーチャート開発の目的

MSPAは、発達障害者個々人の支援のニーズを当事者本人や支援者が一目でわかるように視覚的に示すことにより、本人と周囲との共通理解を促進し、多職種が連携して発達障害



者の支援を迅速に進められるようにすることを目的として開発されました。発達障害と一口に言っても、多動、感覚過敏、不器用など特性とその程度の個人差が非常に大きく、また一般の支援者にとっては、診断名だけからではどんな支援が必要なのかがわかりにくいことが、個別の支援の障壁となっていました。

発達障害者の数が増えていること、また一人の発達障害者に対する支援者は複数であることを考えると、非専門家も含めた支援者にとってわかりやすい支援法を提示できることが実践的に重要であると考えられます。また支援の内容は、個人の特性に合わせたきめ細かいものでなければなりません。発達障害者の不得手とする部分を補う支援だけでなく、本人の長所を積極的に引き出すことが、その方の自己肯定感や生活全般の過ごしやすさの改善につながり、それが優先されるといった場合もあります。



こうした課題に応じえることを目指して、要支援項目とそれぞれの程度を図示し、特性が一目でわかるようなレーダーチャートとして MSPA を開発しました。